

MS&ADホールディングス 電話会議（2012年11月19日開催） 2012年度第2四半期決算説明会 質疑応答要旨

2012年11月19日に実施したIR電話会議の質疑応答（要旨）を以下のとおりまとめました。

Q1：第2四半期の保険引受利益について、三井住友海上では異常危険準備金の取崩を考慮しても200億円強改善しており、あいおいニッセイ同和損保では減益となっていますが、要因についてそれぞれ教えてください。

A1：三井住友海上については、異常危険準備金の取崩が一番大きな要因ではありますが、その他にも、自賠責保険と地震保険を除いたインカードロスが81億円減少していること、また増収を継続していることに伴いアード保険料が100億円以上増加していることがあげられます。

また、あいおいニッセイ同和損保については、国内自然災害の増加によりインカードロスが増加しており、事業費等は40億円減少しているものの、前年同期比で保険引受利益は26億円の減少となっています。

Q2：三井住友海上とあいおいニッセイ同和損保の自動車保険の保険金単価について、2社の状況に違いがありましたら教えてください。また、今後の見通しはどのようなのでしょうか。

A2：保険金単価は資料に記載のとおり、三井住友海上で対物+0.3%、車両+0.0%、あいおいニッセイ同和損保で対物+1.9%、車両+0.8%となっています。対物と車両の保険金単価が上昇傾向にあるものの、両社に顕著な差異はないと考えています。

今後の見通しについては、EI損害率（損害調査費を除く）の通期見込みの数値でご説明いたしますと、三井住友海上で62.6%、前年同期比2.7pt改善、あいおいニッセイ同和損保で62.8%前年同期比2.0pt改善を見込んでいます。

Q3：三井住友海上でタイ洪水によるインカードロスが減少していますが、パーツ安の為替影響による減少分を除いても、下期も減少する方向でしょうか。

また、タイ洪水などの大型自然災害を除いたインカードロスが上方修正となっていますが、火災の大口事故の影響などがどの程度織り込まれているか教えてください。

A3：三井住友海上のタイ洪水のインカードロス減少額172億円のうち、為替影響は50～60億円程度ありますが、下期にどう動くかはわからないことから、上期と同額の影響を年間の計画には算入しています。

また、大型自然災害以外のインカードロスの見通しは年初予想に比べて113億円増加していますが、このうち火災保険で94億円の増加を見込んでいます。これは大口事故や雪災・落雷の影響などの上期実績を踏まえて見直したものです。

Q 4 : 通期の連結予想で海外保険子会社の当期純利益が 67 億円の下方修正となっていますが要因は何でしょうか。

A 4 : 三井住友海上が 50%出資しているシナールマスMS I G生命について、同社の運用資産に時価の低迷が見られたため利益予想を引き下げたことが大きな要因です。

Q 5 : 火災保険の異常危険準備金の特別な繰り入れについて、年初の段階では三井住友海上で 900 億円、あいおいニッセイ同和損保で 160 億円を見込んでいたと思いますが、通期の見込みはどうでしょうか。

A 5 : 通期見込みにおける特別な繰り入れは三井住友海上で 400 億円、あいおいニッセイ同和損保ではゼロで予定しています。変更の理由としましては、火災保険の異常危険準備金の残高は再現期間 70 年の自然災害に備えて積立計画を策定しており、今回の取崩額が当初の予想を下回っていること、また再保険カバーの買い増しにより目標積立額が下がっていることがあります。

Q 6 : 通期見込みにおけるマーケットの前提は 9 月末水準で見ているのでしょうか。

A 6 : 株式相場は 9 月末から大きく変わらない前提ですが、足元の状況を踏まえ 9,000 円を若干超える水準で考えています。

Q 7 : 政策株式の売却計画に変更はありませんでしょうか。

A 7 : 3 年間で 3,000 億円の売却計画に変更はありません。今年度も 1,000 億円超を売却する方向で進めています。

Q 8 : 三井住友海上の特別な繰り入れが 900 億円から 400 億円に減少したとのことですが、保険引受利益にどのように影響しているのでしょうか。

A 8 : 保険金支払額が年初の想定より減少しているため、異常危険準備金の取崩額も年初想定から減少しました。この減少分に相当する特別な繰り入れの金額の引き下げは利益には中立です。一方、再保険カバーの買い増しにより目標積立額が下がったことにより特別な繰り入れを減らした部分については保険引受利益の増加につながっています。

Q 9 : 海外子会社のトップラインについて、現地通貨ベースの増収率を教えてください。また、再保険事業で利益が改善している理由は何でしょうか。

A 9 : 現地通貨ベースでのトップラインの増収率は+2.4%となっており、為替影響は▲47 億円となります。地域別に見ますと、アジアで+3.8%、為替影響▲16 億円、欧州は+6.7%、為替影響▲14 億円、米国は▲1.2%、為替影響は▲2 億円となっています。

再保険事業に関しては、昨年度はニュージーランドで地震が発生しましたが、今年度は大

きな自然災害がなかったため収支がプラスに転じています。

【更問い】

Q： 再保険事業における引受方針の見直しは今後も続くのでしょうか。

A： 三井住友海上の再保険事業は2つの子会社で、欧米を中心とした自然災害リスクと一般リスクの引受を行っていますが、一般リスクの引受については縮小する方向で再編を進めています。一般リスクは利益重視の引受を行う方針であり、結果としてトップラインが減少することもあり得ると考えていますが、自然災害リスクは収益も出ており、今後も拡大していく方針です。

Q10： 正味損害率の通期見込みが修正されていますが、三井住友海上は減少、あいおいニッセイ同和損保で上昇している要因は何でしょうか。

A10： 自賠責・地震保険除きの正味損害率は、三井住友海上で 75.5%から 72.5%に修正しています。タイ洪水の保険金支払いが少なくなっていることに加えて、年初予想比で保険料の増加、自動車のロス改善を見込んでいることが要因です。

あいおいニッセイ同和損保については、67.4%から 68.7%に修正していますが、火災保険と自動車保険で保険金が増加している足元の状況を反映させており、火災保険では第2四半期までに把握した昨年度の雪災の影響なども含んでいます。

Q11： 米国のハリケーンなど、大口の保険金支払いで見込んでいるものはどの程度ありますでしょうか。

A11： ハリケーンサンディの影響は調査中であり、数値は大きく変わる可能性があるものの、現時点で 80 億円程度と予想しています。なお、通期の見通しには個別の事故としては織り込んでいませんが、大口事故による保険金支払いは一定見込んでいるため、その大部分は吸収できると考えています。

Q12： タイ洪水のインカードロスがグループ合計で 177 億円減少しており、為替影響を除くと 110 億円程度の減少とのことですが、これは保険金支払いに際して減ったものなのか、それとも未払いのものを含む全体として減少したものなのか教えてください。

A12： タイ洪水に係るインカードロスがマイナスとなったのは、未払いのものを含む全体として見直した結果です。

為替影響を除いた減少については、明確に分けて把握できていませんが、保険金支払いの段階で、全損で見込んでいたものが修理可能となったことにより、差額が保険金支払いの対象にならないといった内容の減少が主なものだと思います。

Q13：再保険カバーの買い増しにより、火災保険の異常危険準備金の目標積立額はどの程度減少したのでしょうか。

A13：具体的な数値につきましては回答を控えさせていただきたいと思います。

Q14：シナールマスMSIG生命の資産規模はどの程度でしょうか。

A14：総資産は2,000億円規模です。

Q15：ハリケーンサンディは80億円の見込みとのことですが、再保険事業での支払いを含めているのでしょうか。

A15：再保険事業での支払い見込みを含めています。

Q16：時価純資産と統合リスク量の差額はどの程度でしょうか。

A16：いつものようにインフォメーションミーティング(12月4日開催予定)で公表しますので、本日は回答を控えさせていただきたいと思います。

Q17：三井住友海上の火災保険の異常危険準備金は1/3ほど減少しており、目標額に足りていない状況かと思いますが、次年度以降も特別な繰り入れは実施するのでしょうか。

A17：次年度以降は、基本的には、従来どおり保険料の9%の繰入率で積み立てを行っていく予定です。

以 上